

ことを指摘し、イブン=アラビーの系統に属するジャーミーやナジュムッディーン・ラーズィーの著作を利用しながら、漢語でイスラーム神秘主義を解説している。概説書においても劉智および中国におけるタサウワフが取り上げられるようになることを切に望む。

---

Jean-Pierre Torrell O. P.

*Saint Thomas d'Aquin, maître spirituel, initiation 2*

Cerf, Editions Universitaires de Fribourg, 1996, pp.viii+574

長 倉 久 子

フリブール大学出版会の古代・中世思想シリーズ「VESTIGIA」の第19巻に収められた本書『靈性の師・聖トマス・アクィナス』は、同シリーズ第13巻の同じ著者による前著『聖トマス・アクィナス入門—人物と著作』(*Initiation à saint Thomas d'Aquin, Sa personne et son oeuvre*, 1993, xviii-594 pages) の続編である。トマス神学の講座で定評のあるフリブール大学の神学部で正教授 (professeur ordinaire) のポストにあるドミニコ会士の著者は、前著に続いて本書にも表題の下に「入門」(initiation) という言葉を付しているが、その言葉どおり明瞭な表現と明解な構成で書かれており、〈入門者〉への配慮から、註ではふんだんに論文や研究書を列挙し引用しているが、本文では研究史や細かい議論には深入りせず、トマス自身の言葉を引用することによってトマスの〈靈性〉(spiritualité) を浮き彫りにするよう努めている (p.vii)。また、翻訳書の指摘も—もちろん日本語のものは入っていないが—親切であり、入門者にとって最良の手引きとなっている。

ところで表題から、読者はトマスを「靈性の師」(maître spirituel) と呼ぶことに先ず驚くかも知れない。というのも、我々中世哲学研究者は、トマスを通常、アリストテレスの最良の註解者・言語の鋭い分析者・緻密な思索者であり、哲学史上第一級の哲学者、冷徹な哲学精神に支えられて、カテドラルのように堅固で壮大な—そして、無味乾燥な、としばしば我々は嘆くのであるが—神学体系を築き上げた人と看做しているからである。この偉大な〈哲学者〉の生み出した〈神学〉に圧倒されて、

我々はトマスの思想が聖書に基づき、教父たちの遺産に養われ、生きた教会の具体的な現実の中から生まれたことを忘れがちである。しかし、実際には、トマスの思想は教義に関わるとともに深く靈性に関わっている。その表現様式が哲学的神学的であるために、表現の底に流れているトマスの深い宗教性・神秘に向かう敬虔などが見過され、トマスが第一級の神秘家でもある事実が見落とされ易い。こうした見落とされ忘れられがちなトマスの重要な側面を——イデオロギーや護教からはほど遠い精神性からして (p.viii)、トマスの思想は体系ではなく、むしろ靈性、つまり生き方そのものに関わる、現実に向かって開かれたものである——本書で浮かび上がらせることを目指している」と著者は序文で述べている。そして、本文の序論の部分 (I) で、先ず、トマスにとって〈神学〉(theologia: 今日我々の言う〈神学〉théologieの意味とは多少異なる)あるいは〈聖なる学〉(sacra doctrina)とは何であったのか、他の〈学〉(scientia)とはどこが異なるのか、〈神学〉と〈靈性〉(spiritualitas)との関係は如何なるものか、靈性とはトマスにおいて如何なる意味を持っているか、を明らかにしている。「トマスの靈性に関する教えは、彼の神学の内に秘められた不可欠必然の次元である。この意味で、トマスは単に思想家であり思索の師であるというより、むしろ生きる上での師であると言うことができる。いずれの場合にせよ、彼は自分の体系を押し付けるようなイデオロギーは微塵も持たず、むしろ真の師として弟子に自分自身で考えることを教えるのである。換言すれば、彼の思想と生涯は、人間としてまたキリスト者として振舞う特別な仕方を容易に鼓吹しうる諸価値に満ちている。これこそ、〈靈性〉という名に値する」と著者は言う (p.27-28)。

〈靈性〉つまり生き方(に関する教え)は、生きる上での現実をどのように理解するかに懸かっている。生の現実・現場とは、先ず生きるその人自身であり、そしてその生を支えている世界であるが、自分自身を含めた世界全体がそれ自体で自らの根拠となり得ず、世界を超越したもの、つまりこの世界に見出される実体の何ものでもない、神という名で呼ばれているものによらずしてはその究極的な存立根拠を見出しえないことからして、この世界全体を支えている神と呼ばれるものが生の現実の根底に見出される。従って、著者は本論を二部に分け、第一部では、神と世界と人間という三つの現実を、神学者であるトマスがどのように理解し表現しているかを、第二部では、そのような神学的理解から、世界(人間も含む)における、そして神の前にある人間のあり方・生き方をトマスがどのように捉えているかを解説している。

第一部は「三位一体的靈性」と表題が付され、八つの章(II-IX)に分けてトマスの教えが解説される。まず、著者は最初の章(II)を「一切の彼岸」(L'AU-DELA DE TOUT)と題し、〈神は知られざるもの〉として知られる、という神の超越性の強調・否定神学的な側面を明らかにする。トマスは若き日に師アルベルトゥス・マグヌスの下で学んだ偽ディオニュシオスの否定神学から深い影響を受けているが、しかし、「彼は偽ディオニュシオスの全き否定性(apophatisme absolu)に与することはせず」(p.49)「ディオニュシオスを深みから修正して採用し」(p.48)「否定は肯定の権利を剝奪するものではないことを示している」(p.49)。つまり、絶対的に超越する神にはこの世界に見出される実在の属性(完全性)を表わす言葉を本来的な仕方で付与することはできないが、しかし、だからといって、神はさまざまな完全性と無関係なのではない。トマスの否定神学(apophatisme)は決して不可知論(agnosticisme)ではないのである(p.55)。トマスはさまざまな神の〈名称〉を正当化した上で、最も勝れた神の呼び名として『出エジプト記』でモーゼに啓示された〈あるもの〉(Qui est)という名を前面に据える。というのも、この名称は、概念としては無内容であると同時に、我々の周囲を取り巻く〈現実にあるもの〉に繋がっていることを示すからである。(書評からは少しはみ出るが、筆者はIpsum Esseを〈だそのもの〉と訳した。「〈だ〉そのものなる神」『宗教と宗教の〈あいだ〉』風媒社2000。)こうして、現実にあるこの世界と神との関係が続く章(III)で語られていくが、それに先立って著者は、このQui estが新約になると更にEgo sumとして自己を開示し、それによってキリスト論と聖霊論を伴う三位一体論の次元が開かれたこと、それに従い神と世界との関係は三位一体の神の視点から論じられていること、つまり、この世界にとって神は始原(アルファ)であるとともにそこへと帰還していく究極目的(オメガ)であるが、この始原からの発出と帰還は新プラトン主義の図式に則るとはいえ根本的な相違があることを指摘している。創造的な三位一体の神(la Trinité créatrice)(p.80)の不断のはたらきによって存在するこの世界には、至るところ三位一体の神の現存がある。〈創造〉は被造物の側からは神との実在的な関係(relatio realis)であるが神の側からは概念的関係(relatio rationis)であるというトマスの言葉はしばしば誤解されてきたが、「トマスの神は、それぞれのものに、そのもの自身よりもいっそう内密な仕方でもペルソナ的に現存している」(p.101)。トマスは、聖書に基づき、アウグスティヌスや偽ディオニュシオスやヨハネス・ダマスケヌスなど

の偉大な教父たちの伝統を継承し、〈救済〉の観点に立って神と世界との関係を見ているのであり、「トマスの神には、世界に関わりを持たない理論論の非ペルソナの原理と共通するものは何もない」(p.102)。それは、〈世界に關与する神〉(p.103)、自ら存在根拠を持たないこの世界に現存しつつ根底から全面的に支えている神であり、御言によって世界を産み、聖霊によって愛している父なる神 (p.102) である。そして、御言なる御子キリストによって、愛なる聖霊において傷ついた世界を救済し再創造していく父である。三位一体なる神の業 (創造・現存・統率) は、キリスト論と聖霊論なしには成立しない。ところで、聖霊論という言葉に我々は多少の戸惑いを禁じえない。というのも、体系的著作『神学大全』には、キリスト論は見出されても、聖霊論はどこにも見当たらないからである。しかし、実際には聖霊への言及が至るところにあると著者は指摘し (p.204)、キリスト者の生を扱う第二部の一部の終わりの部分は〈聖霊論の集中した領域〉(zones de grande concentration pneumatologique) であると言う (VII)。この〈トマスの聖霊論〉の指摘は新鮮であり、また重要である。

著者は、第一部で、一切を超越する三位一体なる神 (II)、神と世界 (III)、三位一体の神の像なる人間 (IV)、道・真理・生命なるキリスト (V,VI)、聖霊 (VII)、教会 (VIII)、聖霊の働き (IX) についてトマスの教説を解説した後、「世界におけるそして神の前なる人間」と題した第二部において、神によって創造された善き自然を肯定的に受け止め、自然と恩寵の働きによって自己の生を織り成し、三位一体なる神と隣人たちとの親しい交わり (友愛 *amicitia*) の中で完成していくという「靈性」について述べている。最後に本書を締め括って、トマスの靈性の特徴を三位一体的、人間の神化を説くもの、〈客観的〉、〈現実的〉、人間性の開花を説くもの、共同体的、であるとしている。そして、その源泉が、聖書と教父たち (なかでもアウグスティヌスと東方の教父たちの影響を重視している) のみならず古代の異教徒たちの知恵や、生きた教会生活 (典礼) やドミニコ会の伝統にあることを指摘しているが、トマスの靈性は、著者の言うとおり、自然や自然本性の肯定の上に聖霊の働きと友愛を強調し、キリストの全生涯を導き (*exemplar*) とする (つまり、キリストの救済の業を受難に局限しない)、〈健康的で〉〈人類共同体的な〉靈性である。そして、神の超越性の強調によって神の概念化を阻止し、三位一体性の強調によって一切を関係性の中で捉えるトマスの教説は、諸宗教との対話に開かれた普遍性を具えている。著者は〈入門者〉がトマスの思想に直接触れる機会となるようにトマスのテキスト (フランス語

訳)を随所に長く引用しているが、確かにこの書はトマスの真の姿がよりよく理解されていく切っ掛けになるに違いない。

---

Matthias Laarmann

*Deus, primum cognitum. Die Lehre von Gott als dem Ersterkannten des menschlichen Intellekts bei Heinrich von Gent († 1293)*

Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters

Neue Folge, Band 52, Aschendorff Munster, 1999, XII+528 S.

加 藤 雅 人

本書は、ガンのヘンリクス (d.1293) の「第一に認識されるもの (primum cognitum) としての神」説について、主として神学的観点から考察することを企てたものである (S.12)。議論の出発点は、人間知性の中にある有や善といった第一諸概念の内容についての考察である (S.2)。ヘンリクスにとってこれは哲学的であると同時に神学的な問題設定で、そこで主として論じられるのは、そうした第一諸概念によって神 (の本質) がどのようにして人間の認識へと顕現するかという問題である。本書が目指すのは、ヘンリクスの「第一に認識されるものとしての神」説を「13世紀後半に行われた議論の文脈の中に置き、〈第一に認識されるもの〉説の起源と経過の解明に」貢献することを意図した、「成立と影響の歴史研究」である (S.11)。著者はテキスト分析の方法を「文献史的かつ原典分析的な探求手順によって補完された記述的・実証的方法」(S.13)と説明し、これまでヘンリクス研究においてほとんど引用されなかったテキストを詳細に正確にパラフレーズするという仕方でこれを実現している。

本書は4部に分かれる。まず、第I部「ガンのヘンリクスの生涯、著作、神学的統制」(S.18-77)においては、彼の生涯と著作についての研究の現状が整理され、また彼の神学の方向性について簡単に説明される。本書の中心は、第II部「アポステリオリな神認識の射程とその影響力。その成立と発展、そしてヘンリクスによる批判」(S.18-77)、そして第III部「アプリオリな神の存在証明の一要素としての第一の神認